＜前回＞キリスト教社会主義と社会批判

（１）問題――近代の政治思想としての社会主義、キリスト教、近代日本

１．近代という時代の政治状況：国民国家の形成とグローバル化の進展、啓蒙主義
　啓蒙主義の自由と平等を普遍的理念　→
　　アナーキズムや自由主義から社会主義、そして共同体主義に至る、近現代の主要な政治思想が共有する問題圏。

（２）キリスト教社会主義とその限界

４．社会主義：近代――欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成――以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群。
　近代の自由主義的資本主義的社会秩序の進展によって発生した諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境など）を社会変革（改良から革命まで）や社会的共同性・相互性によって克服することを志向し、人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等への拡張を含む平等主義）を内容とする道徳的正義と幸福の理念との実現をめざす。

６．キリスト教社会主義：英国国教会に所属する思想家たち（F.D.モーリス、C.キングスレーら）に指導された社会改良運動。共産主義的な社会主義とは異なり、信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。
　職能別組合や消費組合などの各種の相互扶助の組合運動、そして労働者教育（隣保館・セツルメント事業、労働者大学）を推進。

７．アメリカの「社会的キリスト教」: 1880 年代、アメリカの神学校を中心に生じた神学運動（片山潜(1859-1933)が留学したアンドーヴァ神学校はこれに含まれる)。

８．社会的キリスト教の思想的特徴（隅谷、1977、21-22)。
　（１）神の内在性の強調。　（２）罪人としての人間観の否定
　（３）隣人に対する自由な奉仕の象徴としてのキリストの十字架の強調。

９．アメリカの教派を超えて進展していた「社会的福音」(social Gospel)の主張と一致。

10．明治期の日本キリスト教と近代日本の政治・社会的状況。
　自由民権運動（おおよそ 1870-80 年）への積極的な関与、キリスト教的な戦争論の展開（内村鑑三の非戦論など)、足尾鉱毒事件への取り組み、そして、労働運動・社会運動への先駆的で指導的な関わり。→日本のキリスト教社会主義

（３）植村正久の論じるキリスト教的社会批判

12．キリスト教は近代西欧の形成過程に積極的に関与しただけでなく、西欧以外の諸地域における近代化にも様々な仕方で貢献してきた。これは、東アジア、とくに日本においても同様。

「何となれば、日本キリスト教徒の多数は、当初より社会問題に熱心なりしものなり。日本の開明発達とキリスト教の関係は彼らの一日も忘れざりし疑題なり。キリスト教徒が親子の関係、家庭の改良、雑婚蓄妾等の問題に付きて、いかに熱衷せしか、またいかに熱衷しつつあるかを思え。女子教育の先駆者は誰なりしか」、「彼らは決して霊魂の事をのみ考え居たるものにあらず」(「キリスト教徒と社会問題」、363)

13．植村は、社会問題への関与の意義を認めつつも、それがキリスト教の中心的な活動であるかのように主張する立場には批判的である。

14．明治日本のキリスト教は未だ力不足であり、「他日のために準備」(同、369)をなすべき段階にあるのであって、この段階でなすべきことは、言論による社会への関与なのである。

（４）カルスト宣教師と日本の社会主義思想

16. チャールズ・E・ガルスト（Charles Ekias Garst、1853-1898）、ディサイプル派（Disciples）の最初の宣教師として来日（1883）、日本の農村の貧困問題から社会問題全般に取り組んだ。
　1884 年から秋田で伝道を開始。東北農村は厳しい困窮の中にあった。
17.「明治の土地問題の端緒は、六年の地租改正にあった。わが国資本主義の本源的蓄積に決定的役割を果したこの土地改革は、幾多の問題をはらんでいた。第一に、地価の百分の三と定められた税率が高率なことは、政府自身が改正条例の中に認める所であり、徳川時代の旧法による場合とほぼ等しいものであった。」（工藤、1996、33）
・明治新政府の地租改正、東北農村の困窮、地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ。それに対する地租増徴論（地主への増税による産業資本家の負担軽減）
18. ガルストの伝道方針：「かれら農民に福音を聞かせるためには、かれらの貧困の問題をともに考え、その解決に努力することが必要」（同、114）との認識に基づいた、「すべての神の子たちを、神の食卓につける計画」（同、42）。
　　↓
　地租増徴論（地主への増税による産業資本家の負担軽減）を主張（地租軽減論は小作人を利するところなく、地主の利益になるのみ）、ヘンリー・ジョージ（H.George）の土地単税論
19.「天は主のもの、地は人への賜物」（詩編 115 編 16 節）との聖書の言葉に基づいて、神によって与えられた土地に対する万人平等の権利を主張し、地主による土地独占を批判
21. ガルストの土地単税論（キリスト教信仰と社会主義的経済理論との結合）
　広義に解したキリスト教社会主義（社会的キリスト教、社会的福音、狭義のキリスト教社会主義を包括するキリスト教的な社会思想）の典型的議論。
22. キリスト教社会主義の限界。結果的に小作人の負担が増える、産業資本の独占の強化
23. 最大の問題：キリスト教社会主義の理想主義が有した、社会的進歩への楽観的見方（楽観的な人間理解と歴史理解）、過度の心情主義。
　R．ニーバーが、「愚かな光の子」として指摘した問題。
24. キリスト教社会主義が 19 世紀の楽観的進歩主義的な人間理解の枠内に留まるものであった。人間の深刻な罪について適切な洞察を持ち得なかった、20 世紀の二つの世界大戦という現実に対して十分な対決をなし得なかったこと。
25. 20 世紀の現代神学における現実主義の潮流。しかし、19 世紀の自由主義神学あるいはキリスト教社会主義への全面的否定論は、極論か。→1980年代からの思想状況の変化。
26.「現実」（the real）とは何か。
　ティリッヒ：歴史的現実を構成する力であるが、この力をどのように捉えるかに従って、素朴現実主義、理想主義、現実埋没的現実主義、信仰的現実主義の四つの類型を提示。
　理想主義から現実主義へ。しかし、いかなる現実主義か？
27. Idealismus は、観念論であると同時に理想主義であった。
　　理想を失った現実主義？　ニーバー的な現実主義も、愚かではなかったか。

９．賀川豊彦と組合的共同主義

（1）賀川豊彦と聖書・経済・政治

A.賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』キリスト新聞社。
　「聖書・経済・政治」関連諸論考

１．「宇宙創造と人生再創造」（1936）
　キリスト教兄弟主義、初代キリスト教徒の労働精神
・「生命宗教と生命芸術」（1947）
　社会生活の反映として見たる宗教、基督教社会主義の思い出
・「社会革命と精神革命」（1948）
　日本再建と社会事業の重要性、女性解放の根本精神、民主革命における労働組合の使命
「天の心・地の心」（1955）
２．「聖書社会学の研究」（1922）　「女性讃美と母性崇拝」（1937）
３．「貧民心理の研究」（1915）　「精神運動と社会運動」（1919）
４．「人間苦と人間精神」（1920）
　国家禁酒論、工場立憲運動、日本における賃金労働者の不安、婦人労働者の解放、労働者の負傷の問題、児童虐待防止論、貧民心理について、労働者の心理、人間建築論
・「主観経済の原理」（1920）
　経済心理、マルクス主義、国際組合の原理、生産者議会、消費者議会、賃金制度廃止論、産業戦争における無抵抗主義
・「生存競争の哲学」（1922）
　戦争の哲学、階級争闘と社会進化、
５．「労働者崇拝論」（1918）　「社会病理」（大正末）　「救貧問題」（1928）
「基督教社会主義」（1927）　「世界平和論」（1906）　「世界国家」（1948-1954）
６．「自由組合論」（1921）　「家庭と消費組合」（1927）　「社会構成と消費組合」（1927）
「医療組合論」（1936）　「国民健康保険と産業組合」（1936）
「キリスト教兄弟愛と経済改造」（1936）　「魚業組合の理論と実際」（1940）
「産業組合の本質とその進路」（1940）　「日本協同組合保険論」（1940）
「新協同組合要論」（1947）
７．「中国復興の日本」（未出版原稿・戦時中）　「人格社会主義の本質」（1949）

Ｂ．賀川豊彦（1888-1960）の生涯（略年譜）

1903：兄の放蕩により 15 歳の時に賀川家破産
1904 年（明治 37 年）：日本基督教会徳島教会にて南長老ミッションの宣教師 H・W・マヤスより受洗。
1905 年（明治 38 年）：明治学院高等部神学予科に入学
1907 年（明治 40 年）：神戸神学校（後の中央神学校）に入学。
1909 年：神戸市新川のスラムで路傍伝道を開始。
1911 年（明治 44 年）：神戸神学校を卒業
1912 年（大正元年）：一膳飯屋「天国屋」開業。
1913 年（大正 2 年）：ハルと結婚。
1914 年（大正 3 年）：渡米、プリンストン大学・プリンストン神学校。
1915 年（大正 4 年）：『貧民心理之研究』出版。
1917 年（大正 6 年）：帰国。神戸スラムに戻り無料巡回診療を開始。
1919 年（大正 8 年）：友愛会関西労働同盟会を結成（理事長）、日本基督教会の牧師資格。
1920 年（大正 9 年）：自伝的小説『死線を越えて』出版、ベストセラー。神戸購買組合（灘神戸生協を経て現・コープこうべ＝日本最大の生協）設立。キリスト教系業界紙、キリ

スト新聞（発行元：キリスト新聞社）を設立。
1921 年（大正 10 年）：神戸三菱造船所（現・三菱重工業神戸造船所）・川崎造船所（現・川崎造船神戸工場）の大争議を指導。
1922 年（大正 11 年）：杉山元治郎とともに日本農民組合を設立 1923 年
1923 年：関東大震災罹災者救済活動。
1926 年（大正 15 年）：労働農民党結成（執行委員）
1929 年（昭和 4 年）：日本基督教連盟の特別協議会における「神の国運動」を議決。賀川は「百万人の救霊」を目標として、1932 年（昭和 7 年）まで全国を巡回伝道。
1941 年（昭和 16 年）：リバーサイド日米キリスト者会議でアメリカ合衆国のキリスト教会に「アメリカ教会への感謝状」をおくった。
1943 年（昭和 18 年）：憲兵隊による取調べ、国際友和会日本支部解散
1945 年（昭和 20 年）：戦意昂揚音楽礼拝が日本基督教団戦時活動委員会の主催（8 月 16 日）によって開催、賀川も奨励者として名を連ねる。
1945 年・戦後：東久邇宮内閣参与、勅選貴族院議員。日本社会党の結成に参画。
晩年は世界連邦運動に取り組む（1947 年と 1948 年のノーベル文学賞の候補、1954 年から 1956 年のノーベル平和賞候補者として推薦）

（２）賀川豊彦「友愛の政治経済学」と組合的共同主義

０．賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009 年。Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.

１．「序文」（何が問題か）

・「今日」「キリスト教の教えが挑戦を受けている時代」、「信条が重要ではないというのではなく」「社会での贖罪愛の適用が必要なのである」、「生産者と消費者との間の溝を兄弟愛をもって架橋しなければならない」、「物質主義的資本主義と物質主義的共産主義は共に放棄されねばならないのである」、「心理的ないし意識的な経済を通して新しい社会秩序に至る新しい道を見出そうと試みた」（17）

・「1936 年 4 月、コールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きで「キリスト教的友愛と経済再建」という表題のもとに４回にわたって行なった講演」（18）

２．「第１章　カオスからの抜け道はあるか」

・「世界は混沌とした状態にある」、「今日の貧困は物の欠乏によるのではなく、豊富さから生じている。物財や機械の過剰生産、過剰な労働や知識層の存在からくる苦しみである」「富はごく一握りの人々の手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世界に蹴落とされている」、「レッセ・フェール政策」（19）

「世界の諸問題が」「今では一つであり、一つのユニットとして取り扱われるのでなければならないという認識」（20-21）

「今日のキリスト教会が人間の生活全体を満足させる福音を説いてはいないことを告白しなければならない」、「教会が近代において愛の実践の使命を果たしていたなら、マルクス主義が現在の規模にまで拡大するわけはなかったであろう」、「キリスト者は世界的な友愛運動において、愛の有効な行動を展開することによって、この挑戦に対応していかなければならない」（21）

・「禁教の理由は、さらに４世紀前、イエズス会の宣教師が来日した際」、「政府は３世紀以上にわたりキリスト教にたいして門戸を閉ざしてきたのである。その結果、日本の人々は

いまなおキリスト教にたいして著しい偏見を持っている。いわゆるキリスト教国はいまなお東洋諸国を経済的・政治的に侵略しており、私たち東洋人にキリスト教国にたいする古来の偏見を呼び覚ましている」(22)
・「消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した」、「これはキリスト教的兄弟愛の実践にほかならない。日本は変わりつつある。過去２年間、私たちは宗教の復興を経験しつつある。すべての宗教に活気があり、人々のあいだに広がっている」、「日本では、キリスト教徒の数は少ないが、キリスト教の影響力は、今日、強くなってきている」「社会活動家の多くがキリスト者であること」、「キリスト教のハンセン氏病療養所もいくつかある」「日本労働同盟は東京の教会で始まった」(28)
・「唯物論的な共産主義とキリスト教批判に、率直に向き合わねばならない」、「私はこれらの急進的な人々のうち、キリスト者として踏みとどまった、ほとんど唯一の者である。ほとんどの人々はあれこれの理由で教会を離れていった」(30)
「再びキリストへと連れ戻すまで、彼らの期待を満たすような、現代のキリスト教的プログラムのために何が必要なのかを学ばなければならない」(31)
・「最近のロシア、ドイツ、英国の労働者政党の政府が、世界を現在のカオスから救い出して、いまや至上命題となっている経済再建を為しとげる力を持っていない、と結論せざるを得なくなった」、「ニュー・ディールの「管理資本主義」」「資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではないこと」「資本主義は自由競争の原理に基づいており」、「収奪システム」、「僅かな人々の手中での資本の蓄積」「上流階級ないし有閑階級を産み出す」、「資本の集中とともに、勢力は支配階級に集中する」、「無産の低賃金労働者が大半を占め増え続ける」(32)
「私たちは、唯物論的共産主義も政治的社会主義も達成し得なかった、そして信条主義的キリスト教の力も及びえない、社会の再建、新しい道を、探さなければならないのである」(33)

３.「第２章　キリストと経済」
「Ｉ　主の祈り」
「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、と言う」、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」、「食事」「食卓」「日ごとの糧への祈り」(34)
「「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」。これにつづく三つの祈願における「われら」という代名詞は広く人類を意味する。私たちは自分自身のパンのために祈らねばならない。もし日々の生活をなし得ないのであれば、宗教は無意味になる」、「また、自分たちの小さな共同体だけのための祈りであってもいけない」(35)
「私たちは赦しを、完全な赦しを必要としている」、「経済的な協働をとおしてである」、「兄弟たちが誘惑に陥らないように、環境を変えていかねばならない」、「よい協同組合があるときには、盗みへの欲望がなくなる」、「スウェーデンやデンマーク」、「大都市があると、そこには煙で汚れた文明がある」、「すべてのことが、主の祈りの６項目に含まれている。その中で、キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」(36)
「II　価値の７要素」
「客観的世界と絶対的世界のあいだに、自然と神のあいだには、七つのチャンネルがある。生命、労働（またはエネルギー）、変化、成長、選択、秩序（または法則）、目的がそれで

ある。これらはあらゆるタイプの経済に通じる価値の７要素である。キリスト自身が価値のこれらの七つの要素への基本を私たちに示してくれている」（37）
「キリストはここで、経済的価値の基本原理は生命価値をもって始まることを説いている」「身体の経済は、生命を保持するための活動が価値基準となる」「生命の保全のため」、「食物、衣服、住宅の基本的ニーズが」「公衆衛生施設、警察、消防、反戦施策、その他の生命保護のための手段が必要になる」（37）
「肉体労働の価値は生命の保全と密接に結びあっている」（37）、「失業者といえども搾取されてはならず、雇われると時には、生活給が保証されるべきだ、とイエスは主張する（マタイ xx.1-16）」（38）
「変化や交換の価値」、「交換は非常に重要であり、そのため経済はほとんどこれを基礎にして考えられるようになってきた」（38）
「イエスは、銀行に言及し、利潤やそれが生む利息について述べている」（38）、「彼は、この注目すべき成長という価値原理について私たちの意識を呼び覚ます。イエスが指摘しているように、成長の法則は自然の中にある」、「生産の増大は、交換システムをとおしての人類の互助組織によって、量的にも質的にも促進されている」（39）
「変化や成長が容易に行なわれることは、資本主義文化の特徴である。しかし、単なる変化や成長は必ずしも幸福をもたらすものでも、人格の成長に貢献するものでもない」（39-40）、「選択という価値の第５の要素」「選択を対象とする経済が存在してくる」、「選択について」「自己を検証し、自分の心を吟味するように注意をうながしている」、「職業や家業の選択のための効率の経済の可能性」、「社会立法や職業ガイダンスなど、昔の物々交換経済の時代には考えられもしなかったことである」（40）
「商法、銀行法、協同組合法、労働法など、今日の各種の社会経済法規は、これらの法律によって創設される権益と共存し、それらの権益は社会的意識から発現してきたものである」「権益の経済」「ここにおいて、政治と経済は結びあい、勢力と価値の諸活動が複雑に関係しあう」「社会立法の経済」（41）
「目的価値の変化は文化の類型に影響する」、「文化にさまざまな様式が現れる。同じことは宗教の発展についても言える」、「神への奉仕がそのための手段としての〈富〉の追求と両立することを強調した」、「経済生活が、神の目的を成就すべき宗教生活と一致しないとき、その大切な意味を失うと、イエスは述べていたのである」（41）
「これら価値の七つの要素は、私たちが経済システムを検証するさいの基準である。それらは主観的世界から客観的世界に至る七つの通路である」（42）
「III　十字架の愛と経済の価値」
「イエスの宗教の偉大さは」「彼の意識が神ご自身のそれと一つであったこと」、「人間のあり得る全てを体現したことであった」、「イエスの十字架は、神の愛と人間の愛の完全な融合を示したものである」「贖罪愛」、「神の視点から捉え、人類を救済する神の責任の重荷を共にしたのである」、「私たちはここに個人的価値運動と社会的価値運動の完全な一致を見出す」、「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」、「十字架の愛は経済の価値の七つの要素をすべて含む」（42）
「近代資本主義体制は十字架のもつ経済的含意を無視し、それを経済の価値とは無縁の宗教的な事柄にすぎないものとして、十字架を足下に踏んづけてきた」、「神の国のためのキリストの計画」（43）
「ソーマは民族の全体や社会の全体をも意味する」、「十字架を背負う愛が社会経済の原理であると認められるならば、個人の所有権や相続権はすべて神と社会に献げられるものと

なり、利潤や収益はすべて神に属するものと解され」、「より大いなる社会愛」（44）
「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」（45）
「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」、「おのれの神信仰が言葉だけの皮相な信仰にとどまる、自己中心的な人たちがいる」、「神の創造の業、とくに人間を愛し得ないなら、その愛は自己矛盾を抱えている」（46）
「行動的に考えなければならない」、「神は愛であるという信仰と知識は、愛の行為においてしか認識され得ないのである」、「愛こそが、七つの価値要素を統合する。愛において、絶対的存在が相対的存在に語りかける」（47）
「プロテスタントは信仰を強調しながら、神の絶対的な力を制限する。他方、カトリックは愛を強調しながら、神の愛に制限を設ける。これらの失敗にもかかわらず」（48）
「IV　パウロの経済価値の観念」
「キリストは神を第１にしたが、そうすることで、経済を無視することはしなかった」、「私たちの経済生活を神中心のものにしていくのでなければならない」（48）
「キリストの死後、宗教的共産生活において実践に移された。パウロの 13 の書簡を学ぶと、初期の教会が愛他的な労働経済を実践していたことがよく分かる」（49）
「贖罪愛の遺産の継承」「貧しい人々を助け、宗教的協働生活を実践することが至上命令であると考えた」、「宗教生活と社会生活のあいだには何ら矛盾を感じていない」、「信仰が」「抽象的なものであれば」「両者に矛盾を感じるかもしれない」、「私は信仰を信条の事柄とは考えない。宗教生活は神の愛に依拠する生の全体であると私は信じる」（50）
「V　贖罪愛と経済革命」
「中世の汚濁や近代資本主義体制の侵入」（51）
「ローマ法の原理は、世界を救おうとしていた贖罪愛の自覚的生活を押しつぶしながら、機械的な資本主義の支配へと続いてきた」
「今日、多くの教会はその贖罪愛をもっぱら信条的なものとして保持することによって、楽な思いをしようとしている」（52）、「残念ながら、教会組織の大半は、不当利得社会の特権階級に依存している」、「キリスト教会の存在がなぜ脆弱で、現代世界の騒乱になかで教会がなぜ無力なのか、を明らかにする」（53）

４.「第３章　唯物論的経済観の誤り」
「I　唯物論的経済観の無力性」
「アダム・スミスによる宗教と経済の分離は一時期成功したかに見えた」、「しかし」、「宗教と経済の二つの領域は一緒になり、一体として動くのでなければならない」（54）
「過去の過ち」「それは経済が人間の意識から独立していると想定し、経済学を記述的な科学として取り扱ったことにあった」、「あまりにも自然主義に傾斜したため」
「マルクスは、経済学を自然科学として取り扱うことができると考え、すべて唯物論的決定論で分析できるとする特殊な方法論を擁護したのである」、「この時期、経済学者と同様

に、神学者も、経済学は自然科学の領域に入れられるべきだと考えていたのだからである」
「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「１国の文化はそう容易には説明されない」（55）、「単なる物質生産様式だけに基づいて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」（56）
「II　社会的意識の覚醒」
「人間の精神的な目覚めが発明や発見をとおして、私的所有権や遺産相続や契約権などの概念に基本的・革命的な変化をもたらす」、「プロテスタンティズムは」「資本主義的文化の勃興に道を開いたのである」（56）
「16 世紀の契約や相続の概念の基本原理は、大規模な大量生産の利用によってもたらされたカオスのなかで失われ、新たな賃金奴隷階級を創設することとなった」「社会正義の感覚の喪失」（57）
「III　心理的経済」
「自覚的な社会意識は生産と消費という二つの角度から発展してきた。経済心理の動きは、以前には夢想だにできなかった先物買いの操作を考案した」、「まだ存在しない物を取り扱うのである。貨幣の流通は人間の信用意識に依存している」
「唯物史観の概念は、従前の社会を説明するのには役立ったかもしれないが、時間を含む心理的経済を取り扱う社会経済的社会の現象を説明するためには役に立たない」、「かくして、唯物論的経済は心理的見解に席を譲っていかねばならない」（59）
「連帯性を欠く民族は株式会社をつくることができない」、「互助の意識が発展していない社会では、時間を含む交換のすべて、それに心理的な公正を要する不動産市場とか株式市場とかは不可能になってくる」（60）
「IV　身体、感覚、意識の経済」
「経済的な欠乏が心理的であるという事実」、「経済のさらなる心理的文脈」、「人間の欲求」（60）
「「身体経済」は「感覚経済」に進展する」、「「感覚経済」は」「「意識経済」と呼ぶものに進展する」、「人間の関心は感覚的満足のレベルから知的レベルへと進む」
「追憶の感情を満たすために、私たちはあらゆる種類の記念碑や記念品をつくる」（61）
「唯物論では現代社会の再建の問題は解決できない」、「唯心論的な経済史観」、「ある時代の文化は、物質的な生産・分配・消費の形態を発展させ制御するその時代の人々の意識生活の覚醒度によって、決定される」（63）
「V　資本と労働」
「自然の土地はそのままでは人間の生活には価値を持たない」、「社会的な心理がその価値に作用し始める」（63）
「VI　原始的文化の精神的基礎」
「共通言語」「ギルド」「キリスト教的な友愛関係」（66）
「VII　機械文明史の唯心史観」
「マルクスの唯物史観には根本的な訂正を加える必要を感じる。社会的エネルギーの表象である貨幣の力は、確かに、物質的な事柄とされてよい。人間の貪欲として知られる心理的要因が、考えに入れられねばならない」（67）
「マンモニズムは強欲な自己中心的現実主義を意味する」、「資本主義を純粋に唯物的と考えるのは大きな間違いである。そこに横たわっている心理的側面はずっと重要である。資本主義のシステムは、結局、自己中心的な搾取のシステムにほかならない」（68）
「VIII　宗教的価値と経済的価値の結合」

「生命、労働、変化、成長、選択、秩序、目的という七つの類型の価値は、人間の意識の発達により発展する」、「客観的世界と主観的世界を連結する七つの通路」、「チャールズ・ダーウィンの進化の世界はこれらの価値の七つの類型の法則を認めている」
「経済的な価値は主観的ならびに客観的な価値から分離されたものではない。それはむしろ、人間の意識活動全体の基礎なのである。意識経済を拒否するどんな経済観も、十分ではない」(69)
「共産主義と科学的社会主義はともに、宗教的な概念に関わるある宇宙観を持つ」、「さまざまなイズム」「の創始者や賛同者は、それぞれの仕方で、宇宙におけるある種の宗教的価値の形態を追っていることを、見落としてはならない」、「彼らのうちに宗教のある面への類似性を見ることができよう」
「唯物論的経済学と唯心論的経済学」「本質的な違いは」「一方が決定論的宇宙観を選び、他方が可能性への信仰に基づく目的論的見解を選ぶところにある」
「今日のように、人間の意識が目覚めた時代においては、人間の交換行為と人生の目的は分離され得ない」、「私たちの次の段階は」「経済的価値である交換価値を宗教的にしていくこと」、「協力の経済が社会的連帯の意識に基づいていること」、「この機械文明を今一度精神化する力」(70)

５.「第４章　変革の哲学」
「I　暴力革命」
「暴力革命が、経済革命を遂行することに失敗した七つの理由」(71)
「II　経済革命」
「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」(74)、「真の経済革命は、キリストにおけるごとく、いのちについての目覚めた意識が社会化されるときにのみ達成される」(76)

６.「第５章　世々を貫く兄弟愛」
「I　愛の実践」
「キリスト教史の最たる特徴は兄弟愛の展開である」、「愛餐の物語」、「愛餐は特に失業した人を助けるために企てられたものであった」「失業者を救済する義務」、「魚とパンの食事」(77)
「II　修道会」
「６世紀以前については詳しくは分からないが、真のキリスト教的兄弟愛を明らかにする修道院との連関で、多くが保護され展開されていたこと」、「現在のセツルメントのような働き」(79)、「いわゆる「暗黒」時代におけるキリスト教の進展の事実は、キリスト教的友愛運動だったキリスト教的労働者ギルドと関係があると考える」(80)
「III　ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV　再洗礼派の運動」「V　プロテスタント自由主義」
「VI　キリスト教的友愛の経済実践」
「キリスト教的友愛の発展史」「ほとんど例外なく、労働は尊重され、金銭への利子は許されなかった」(85)

７.「第６章　現在の協同組合運動」
「Ｉ　開かれたコミュニティを」
「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」（87）
「II　ロジデール・システム」「III　ライファンゼン・システム」「IV　日本における協同組合運動」
「Ｖ　強制協同組合」
「収奪の無い計画された経済の体系」、「徹底した教育運動から始めなければならない」、「意識的な自覚と自発的な行動なくしては、協同組合運動は達成されない」（93）
「VI　協同組合運動に対する反対」
「移行のプロセスは、だれにも苦難を及ぼさないよう、極めてゆっくりとしたものとなるだろう」、「資本主義的なやり方から協同組合の方式へと、考え方を変えなければならないのである」（96）
「VII　精神的運動としての協同組合」
「協働組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」（98）、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」（99）

８.「第７章　兄弟愛の行動」
「I　多様な互助組織の必要性」
「今日存在するのは資本主義である。資本主義は無限に自然資源がある間はまだよいが、私たちが自然の資源を使い果たしてくると、悲惨と貧困の恐ろしい状態が起こる。そうなると、生活を護り、経済状態を適正に公正に調節していくために、兄弟愛の運動が不可欠となる」（103）
「II　保険協同組合」「III　生産者協同組合」「IV　販売者協同組合」「V　信用協同組合」「VI　共済協同組合」「VII　利用協同組合」「VIII　消費協同組合」

９.「第８章　協同組合国家」
「I　協同組合国家の精神的基盤」
「友愛意識の覚醒の程度」、「贖罪愛の精神的基盤がない限り、成功の可能性はほとんどない」（128）
「II　協同組合国家」「III　協働組合連盟」「IV　産業議会」「V　社会議会」「VI　内閣」「VII　選挙」「VIII　警察制度」「IX　資本主義から協同組合へ」「X　私有と個人企業」「XI　慈善と教育」

10.「第９章　友愛に基づく世界平和」
「I　戦争の原因となる経済」
「縮小してゆく地球上で国民間の争いを続けるのは不毛なこと」（148）
「宗教的対立によって惹き起こされた戦争もあった」、「世界平和に対する脅威として現存する状況は大部分が経済的なものである」「人口過剰」「自然資源の欠乏」「国際金融の問題」「貿易政策の摩擦」「輸送政策の摩擦」（149）
「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念な

ことであるが」（150）
「II　ロイド海上保険協会を見よ」
「III　協同組合貿易と世界平和」
「国際信用銀行」（154）、「諸国民を教育していく問題に帰着」（155）
「IV　国際経済会議」
「経済連盟」（156）
「V　国際協同組合」
「現在の傾向は、弱い国々の窮乏を利用し、それらの国を足下に踏みにじることにある。これは、個人に対してであれ、国に対してであれ、キリスト教的態度ではない」（158）
「VI　結論」
「猜疑心」「軍備に莫大な支出をしている」、「私たちの意識において経済がまだ精神化されていないからにほかならない」
「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」（159）
「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいますぐ始めよう」（160）

＜参考文献＞

１．雨宮栄一『青春の賀川豊彦』（2003）、『貧しい人々と賀川豊彦』（2005）、『暗い谷間の賀川豊彦』（2006 年）新教出版社。
２．ロバート・シルジェン『賀川豊彦――愛と社会正義を追い求めた生涯』新教出版社、2007 年。
３．阿部志郎・雨宮栄一・武田清子・森田進・古屋安雄・加山久夫『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009 年。
４．賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦』新教出版社、2011 年。
５．C・H・ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』日本基督教団出版局、1982 年（原著・1965 年）
第二章「近代における日本自由主義神学とその社会に対する関心」
海老名弾正（一八五六―一九三七年）
大塚節治（一八八七年生まれ）
賀川豊彦（一八八八―一九六〇年）
６．Thomas John Hastings, *Seeing All Things Whole. The Scientific Mysticism and Art of Kagawa Toyohiko（1888-1960）*, PICKWICK Publications, 2015.
７．トーマス・セドラチェク『善と悪の経済学――ギルガメシュ叙事詩、アニマルスピリット、ウォール街占拠』東洋経済新報社、2015 年。
８．田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004 年。
９．ラスキン『この最後の者にも　ごまとゆり』中公クラシックス、2008 年。
10．伊藤邦武『経済学の哲学―― 19 世紀経済思想とラスキン』中公新書、2011 年。